

学生記者の

多摩ぶらり散歩

1

多摩動物公園

中央大学の周辺には、さまざまな史蹟をはじめ、豊かな自然やお楽しみスポットが数多くある。でも、意外と気づいていなかったり、知っていてもなかなか行くチャンスがなくて、いつも素通りという人が多いのではないだろうか。そこで今号から学生記者がお薦めスポットを紹介する。題して『学生記者の多摩ぶらり散歩』。はたして、何やら新発見がありますでしょうか。

「アリからゾウまで」の動物公園

中央大学からモノレールで一駅が多摩動物公園。歩いても10分もかからないお隣さんだ。すぐに行けるのに、なかなか行かない、近くて遠い「スポット」でもある。

私たち（上田記者と吉田記者）は、気温34度を越える猛暑日の8月4日、入園料一人600円（一般）を払って多摩動物公園を訪ねた。この暑さでは、来園者は少ないだろうと思いきや、平日にも関わらず、園内には大勢の親子連れがいた。手にしたパンフレットには、「アリからゾウまで出会えるところ」とある。大きさの比較の妙が、園内を巡る楽しみを増幅させる。

親子連れと共にガイドツアーに参加

多摩動物公園と言えば、コアラが有名だが、コ



ガイドさんの説明を熱心に聞く

アラを見るのではなく、「動物解説員」のガイドさんが、園内のコースを案内してくれるツアーに参加することにした。この日のテーマは、『アフリカの草食動物たち』。キリンやシマウマ、それに陸上最大のアフリカゾウなどがあるアフリカ園をまわるコースだ。参加者は親子連れを中心に15人ほどで、私たちがそれに仲間入りした。

最初に見学したのはキリンで、シマウマやダチョウ、ペリカンなどと一緒に暮らしている。はた、と頭上を見上げると、籠の中にエサが用意されていた。私たちの頭上にワイヤーが通っていて、そこを通ってエサがキリンのもとへ運ばれていき、それをキリンが長い舌を使って食べる。その様子を観察する。

キリンには眉毛がある!?

キリンは長さ50センチもあるという舌を伸ばして、餌籠から上手にエサを食べる。舌がこんなに長いとは。間近に見て、びっくりだ。観察中、動物解説員の岩淵けい子さんが解説をしてくれる。



高い所に吊るされたエサを食べるキリンの親子

「キリンは眉毛のある数少ない動物です」と聞き、参加者全員が一齐にキリンの眉毛を探す。「ライオンは色を識別できないので、キリンは模様で隠れます」。

「キリンは、爪先立ちしています」と聞き、足の動きを観察する。さらに、岩淵さんがかばんから取り出したのが、キリンの爪としっぽの毛。説明を受けながら、じっくり観察するとキリンに愛着がわいてくる。普通に園内を回るだけではできない貴重な体験である。実に面白い。

ゾウのしっぽは極太の針金

キリンに別れを告げ、ダチョウやオリックスを



水浴びするゾウ

見ながら歩いて行くと、アフリカゾウの前にたどり着いた。

「陸上で一番強いといわれるゾウの脳は人の5倍もあり、非常に感情豊かです」という解説にまでも驚かされる。すると岩淵さんがかばんの中から、例によって「小道具」を取り出した。今度は何やら極太の針金かワイヤーのようだ、と思いきや、なんとそれは「ゾウのしっぽ」だという。触ってみると、大変丈夫で硬い。とてもゾウのしっぽとは考えられない。新しい発見だった。

「園」でなく、「公園」の多摩

約50分かけてのツアー終了後、岩淵さんにお話を伺うことができた。岩淵さんは、生物系の大学を出てから2年間は飼育の研究をし、その後、動物解説員になり、現在10年目。多摩動物公園には、二人の動物解説委員が在籍し、ガイドツアーだけではなく、遠足や総合学習などへの対応も行っているそうだ。



動物解説員の岩淵けい子さん

岩淵さんは、多摩動物公園の特徴について、「上野動物園は動物自身を見るところなのに対し、多摩は動物の動きをよく見られるところだ」と教えてくれた。

多摩動物公園は、公園スタイルを採っているのではなく「公園」という名称を使っている。「自然のなかで動物がゆったりと過ごせるようになっていく」わけだ。多摩動物公園の楽しみ方について、岩淵さんは「公園だから、すこし足を止めて、自分が知っているものを見るのではなく、アジア園だったり、アフリカ園だったりを1日かけて見るのが良いと思います」とアドバイスしてくれた。

無柵放養式で、こころし50周年

多摩動物公園は今年で開園50周年を迎えた。世界的にもあまり例のなかった柵を設けずに動物を育てる無柵放養式を取り入れ、1964年にサファリパークの原型となったライオンバスを始めるなど、できるだけ動物を自然に近い環境で見せようとする様々な取り組みをしてきた。

動物の不思議や魅力をリアルに感じることができると、楽しい。日常を抜け出したいと思ったときには、ほんの少し足を伸ばして多摩動物公園を訪れ、お気に入りの場所ですっきり動物と自然を楽しんでみてはいかがだろうか。

（学生記者 上田雄太 文学部3年 / 吉田百合香 法学部3年）